

露伴初期

井波律子

(一)

幸田露伴は一八六七年（慶応三年）に生まれた。翌年から明治が始まるこの年には、尾崎紅葉、斎藤緑雨、正岡子規、夏目漱石も生まれている。さまざまな形で明治の文学を担った人々の多くが、この体制の変わり目の時期に生まれ合わせたことになる。

幸田露伴（一八六七～一九四七）、本名幸田成行しげゆきの家は代々、徳川幕府のお坊主衆（表坊主）を勤めていた。お坊主衆の主たる職務は、江戸城に登城する大名たちの世話をすることにある。露伴が、こうして明治維新によって崩壊した徳川幕府と深くつながる家の出身だったことは、その生き方や文学に陰に陽に大きな影響を与えた。

露伴が生まれてまもなく、幸田家はよって立つ基盤を失ってしまった。しかし、まだ家作や地所が残されており、急に明日の生活に

困ることこそなかったが、なにぶん大家族であり、日々ジリ貧の状態であった。そんな状況のなかで、露伴は一八七二年（明治五年）、六歳（数え年）のころから、書家にして文人の関雪江の姉、関千代について、読み書きを習い、これと並行して、一八七三年（明治六年）七歳のころから、会田某について、『孝経』を手初めに「四書五経」の素読を学んだ。まさしく旧時代さながらの伝統的スタイルによって、露伴の基礎教養は培われたのだった。ちなみに、このころ露伴は初恋も経験している。相手は、関千代の代理で、子供に読み書きを教えていたお蝶さんという、当時十七、八の少女である。のちにこのときのことをふりかえり、

こうと、六歳むっつか七歳ななつかな、兄に引かれたり婢きんなに負はれたりしていろはを習ひだしたのが抑々おおくじりの大失敗おおくじりの発端はじまり、此の御庇蔭おかげで大分おおく碌ろくでも無い事を覚え、八歳やっつで奇麗な姉さんだと思つた女に可

愛がられて、其の御庇蔭で僻み根性といふものを覚えさせられ、まだ口惜しいは十三で大人聖人といふ何でもないものを有難がつて子曰くに魂魄を蠹蝕まれ……（以下略）

〔「明暗ふたおもて」明治二十八年〕

と、老子の「学を絶てば憂いなし」（第二十章）にのっとり、勉強を始めたせいで、女性のことも含め、知らないでもいいことを知ってしまったと、諧謔的な口調で述べている。

早くも前途多難を思わせる早熟な少年だった露伴は、関千代がお茶ノ水の女子師範学校の先生になり、塾が閉鎖されたために、一八七五年（明治八年）九歳で東京師範学校の下等小学（後の附属小学校）に入学、はじめて正規の学校教育をうけた。この間、同級生から草双紙を借り、兎雷也・弓張月・田舎源氏などに読み耽ったりもした。

かくして四年、一八七九年（明治十二年）、十三歳で小学校を卒業したあと、東京府第一中学に進学する（得意科目は数学）。このまま行けば、文明開化の時代の新教育路線に乗って、露伴もそれなりのコースをたどったにちがいない。しかし、このころ幸田家の財政が逼迫したため、翌年、やむなく中学を退学せざるをえなくなる。この間の事情については、「少年時代」（明治三十三年）および「学生時代」（明治三十九年）にくわしい。

これによれば、一八八〇年（明治十三年）、十四歳で中学を退学し

たあと、露伴は、湯島聖堂の図書館に通って読書三昧の日々を送り、やはり図書館に通っていた淡島寒月と知り合う。この少年時代の図書館通いを皮切りに、露伴はけっきょく生涯にわたって独学を続けることになる。

もっとも、翌一八八一年（明治十四年）、十五歳のとき、時代の趨勢に合った一芸を身に付けさせようとした父の意志で、露伴は東京英学校（後の青山学院）に入り、すでに就職していた長兄の成常のもとに身を寄せて通学した。下町合理主義の幸田家では年長の者が、順々に弟妹のめんどうを見るという不文律があったのだ。（のちに露伴もまた下の妹の幸や弟の成友を寄宿させ、めんどうを見ている。）

こうして英語を学ぶと同時に、露伴は菊地松軒の主催する漢学塾に入り、白話で書かれた朱子の言語録『朱子語類』を習い、白話を読むコツをマスターした。露伴は幼いころ受けた素読のトレーニングにより、「四書五経」をはじめ、文言（書き言葉）で書かれた漢文の読み方はお手のものだったが、白話の文章構造は文言とは異質であり、やはりトレーニングを経なければ、なかなか読めない。菊地松軒の塾で、白話の読み方をマスターし、白話で書かれる俗文学、すなわち明清の小説や元曲を難なく読みこなせるようになったことは、小説家幸田露伴にとって大きなベースになった。というのも、後述するように、ことに露伴の初期の小説は、明清の白話小説から

ヒントを得、これを下敷きにしたものがきわめて多いのである。

英学校と漢学塾の二本立ては、しかし、約一年しか続かなかつた。翌一八八二年（明治十五年）には、またまた経済的事情によつて東京英学校を退学せざるをえなくなる。ただ、この一年で、発音はからしダメだが、英文を読むことができるようになり、後年、英語で書かれた釣りの本を読んだりしている。英学校を中退したとき、露伴はまだ十六歳だった。十六歳で、すでに中学校、英学校と中退を繰り返したのだから、尋常ではない。むしろ直接の原因は経済的なものだが、露伴自身、型にはまった学校教育に向かない資質であり、自分の資質や好みに合わないものは、すぐ放棄する癖があるから、このたび重なる中退もそのへんに本当の原因があるのかも知れない。

英学校を中退したあとも、漢学塾にはしばらく通った。当時、英語や数学の塾はやや営業的で、月謝の制度もちゃんと整っていたのに対し、漢学塾のほうはいたって古風で、紹介者を通し最初にわずかの束修をおさめさえすれば、あとは「道徳的人情的義理的」（「学生時代」）ですみ、ほとんど月謝がいらなかったことも、漢学塾通いが続いた一つの大きな理由だろう。

露伴と同時代人の夏目漱石は、「翻つて思ふに余は漢籍に於て左程根底ある学力あるにあらず、然も余は充分之を味ひ得るものと自信す」（『文学論』序）と述懐しているように、のちに学んだ英文字

より、幼いころから親しんだ漢籍への共感が強いことを自覚しながらも、異文化たる英文学と格闘し続けた。

しかし、漱石と異なり、自らの快感原則に合わないものと葛藤する趣味のない露伴は、新時代向きだが、馴染みきれない英語にはやばやと見切りをつけ、幼いころから慣れ親しんだ漢文に、さらに習熟することの方を選んだ。露伴の読書の範囲は、文言に白話を加え、漢籍をより広く深く読みこなすという形で、拡大されていったのである。

といつても、生活レベルの問題として、いつまでも漢学塾と図書館を往復し、ブラブラしているわけにもいかない。そこで翌一八八三年（明治十六年）、十七歳の露伴はより実用的な一芸を身につけるため、自らの意志で試験を受けて電信修技学校に入った。中学校のときから数学を得意とするなど、理科系のセンスがあったため、成績優秀で給費生となって手当をもらい、二番目の兄の郡司成忠（むねじ）の家に居候しながら、電信修技学校に通った。のちに千島探検（せんし）で名を馳せた七歳上の次兄郡司成忠は、明治五年に創設された海軍兵学寮の第一期生で、当時、海軍中尉になっていた。

電信修技学校の生徒は一年間、官費で技術教育を受け、卒業後一年、東京の中央電信局で実習したあと、地方の分局に三年間勤務するのが、規則であった。今度は露伴もちゃんと卒業して一年の実習も完了し、地方の分局に派遣されることになった。漢学塾は、修技

学校に通学中、暇がなくなったのか、いつしか行かなくなっていた。図書館通いのほうはかなり後まで続けていたが、これにも終止符を打ち、一八八五年（明治十八年）、十九歳の露伴は赴任地、北海道の余市へと向かう。このときは船旅であった。

余市において、露伴はたずさえて行った漢籍を読む一方（明治十八年に出た坪内逍遙の『小説神髓』もここで読んでいる）、充分に生活を楽しんだ。生涯の趣味となった釣りや将棋もここで覚え、猟銃の扱いに慣れ猟を楽しむことも覚えた。ところが、一八八七年（明治二十年）八月、まだ一年余りも赴任期間を残しながら、突然、露伴は職務を放棄して、余市から脱出、東京へ帰る。理由はこみいった女性問題とおぼしい。そのときのことを、のちにこう記している。

……十九二十歳で愚な慾が出て、危かつたは二十一、男二十一の本文通り下手にまごついたら命沙汰、子曰くに魂魄が弱つて居ただけ死にもせざつたが、今考へれば彼時に、「死ぬかよ死のう死ぬ死ぬは」と男らしく埒を明けて仕舞つた方が、慙に罪が浅かつたかも知れぬ。

〔「明暗ふたおもて」〕

よほど差し迫ったむずかしい恋愛沙汰があったと思われるが、ともあれ明治二十年の八月二十五日に余市脱出を決行、一か月以上後の九月二十九日に、ようやく東京にたどりつく。露伴はこの脱出行

の一部始終を日記体で記し、六年後の明治二十六年、『突貫紀行』と題して刊行している。『突貫紀行』の冒頭にはこうある。

身には疾あり、胸には愁あり、悪因縁は逐へども去らず、未来に楽しき到着点の認めらるゝなく、目前に痛き刺激物あり、慾あれども銭なく、望みあれども縁遠し、よし突貫して此逆境を出でむと決したり。（中略）

きてゐたるものまで脱いで売りはてぬ

いで試みむはだか道中

これをプロログに、露伴はじつさいに旅の間中、この紀行文を書き続けたものと思われる。ここには、追いつめられて東京に逃げ帰るにしては、おりおりに狂歌を挟み込むなど、全体に呑気な遊び心があふれている。「よし突貫して此逆境を出でむ」と大見えを切りながら、函館から本州に渡るとき、露伴はこう思案するのである。（九月）十日、東京に帰らんと欲すること急なり。されど船にて直航せんには囊中足らずして興薄く、陸にて行かば苦しみ多からんが興はあるべし。

そこで、仙台に「我が金を得べき理ある筋」の知人がいるのを幸い、陸行を決断、まず青森行きの船に乗りこむ。

青森についたあとは、「途中帽子を失ひたれど購うべき余裕なければ、洋服には『うつり』あしけれど手拭にて頬冠りしけるに、犬の吠ゆること甚しければ自ら無冠の大夫と洒落ぬ」と、洋服に頬冠

りという珍妙なスタイルで、歩いて歩いて歩きぬく。その間、食べ物にあたりたり、だまされて腐ったゆで卵を売り付けられ、「やす玉子きみもみだれてなぐるめり知りなば惜しき銭を捨てむや」と狂歌を作り、腹立ちをまぎらわしたり、足にマメができて泣かされたりしながら、二週間かけて、ようよう仙台にたどりつく。このときには、きれいきっぱり無一文になっていた。

十日近く待たされたあげく、ようやくかの仙台の知人から、いくらのお金と福島までの馬車券を受け取る（この間、別の知人宅に滞在）。すぐ仙台をたち福島に到着したとき、すでに郡山から東京まで汽車が通じていることを知る。もう夕方だったがここで一泊すれば、汽車賃に食い込むと思ひ、夜を徹して福島から郡山まで歩くことにする。途中くたびれはてて、何度もへたばり、

初めは路の傍の草あるところに腰を休めなどせしも、次には路^{みち}央に蝙蝠傘を投じて其の上に腰を休むるやうになり、終には大の字をなして天を仰ぎつゝ地上に身を横たへ、額を照らす月光に浴して、他年のたれ死をする時あらば大抵かゝる光景ならんと、悲しき想像などを起こすやうなりぬ。

と、惨憺たるありさまだったが、なんとか郡山にたどりつき、やっとの思いで汽車に乗りこみ、九月二十九日東京着。余市を出てから三十五日目であった。ちなみに、のちに福島から郡山への辛かった道のりを回想し、「里遠しいぞ露と寝ん草まくら」という句を作り、

これが「露伴」というペンネームのもとになった。このペンネームが示すとおり、余市から東京へもどる苦しい旅は、幸田成行が小説家幸田露伴に生まれ変わるための、一種のイニシエーションだったといえる。

いったんは近代的な職業である電信技師となり、これで生計を立てることが可能になったにもかかわらず、エロスの魔に憑かれ「悪因縁」に絡まれてニッチもサッチもゆかなくなった露伴は、この事件で、自分が実用向きの人間でないことを、嫌というほど思い知らされた。以後、露伴は、文明開化の現実社会に背を向けて、幻想世界を紡ぎだす物語作者としての道を歩きだすことになるのである。

(二)

だが、東京にもどった露伴は、まずきびしい現実と直面せざるをえなかった。職務放棄をして舞いもどった露伴に対して、両親は非常に不機嫌であった。ちなみに露伴が余市に行っていた間に、家の状態はだいぶ変化していた。法華宗の信者だった父はキリスト教徒になり、洗礼まで受けていたし、六歳下の弟成友は一中卒業後、一高を受験して落第、受験勉強中であり（翌年合格）、三歳年下の妹、延は上野の音楽学校を卒業して、助手となり月給八円を得ていた（翌年、最初の音楽留学生として渡米）。

考えてみれば、こうして弟や妹がこぞって正規の学校教育のコー

スに乗っていたのに対し、露伴だけが早々とはずれてしまったのも、不思議といえは不思議である。おそらく長兄や次兄の経済力が増し、弟妹の学業援助が容易になったのであろう。幸田家のドン底時代に成長した露伴は、ワリを食ったのだ。といっても、いまさらどうしようもなく、二十一歳の失業者露伴は、肩身のせまい思いをしなから、しばらく蟄居した。この時期について、のちに露伴はこう記している。

……窮して窮して窮し抜いても薄いながら鬚髭ある面して父母に小遣い銭乞ふも悲しく、又大切の朋友に目腐れ金の合力頼むも腹の見らるゝやうにて口惜ければ、たま〜妹に貰ふ五十銭一円を儉約に儉約し、鉄道馬車に乗りたるところを辛防して僅に煙草を買ふ程なさけ無き頃、(以下略)

〔醉興記〕明治二十二年

このどんづまりの状況のなかで、露伴は淡島寒月から借りた西鶴の本を筆写するかわら、デビュー作「露団々」を書きつづける。「露団々」が完成したのは、余市からもどって一年あまりたった、一八八八年(明治二十二年)の暮れだった。この原稿を友人のついで、当時の有名な評論家依田学海に見せたところ、学海は大いに感心し、これに勇気づけられた露伴は、二人の友人に依頼して、これを雑誌「都の花」を出している金港堂にもちこんだ。その結果、首尾よく「露団々」は売れ、大みそかに五十円を受け取った。音楽学

校の助手をしていた妹延の給料が八円だから、これは大した金額である。実際に「都の花」に連載されたのは、翌年の二月から八月。連載開始とともに大評判となり、露伴は職業作家として幸先のよいスタートを切ったのだった。

「露団々」は、なんとしても人の耳目をひきつけ、文壇に打って出たいという気持ちがありありと見える、奇抜で華々しい小説である。ここには、文学的野心というより、職業作家として生計を立てたいという切実な願望が透けてみえる。「露団々」の物語世界は、ぶんせいむ(紀伊国屋文左衛門のもじり)というアメリカの富豪が、愛娘るびなの婿選びのために、世界中に広告を出すところから動きはじめ。婿候補者の資格として九か条が列挙されるが、最後に「決して不愉快の感覚を抱かずして、常に愉快なる生活をなし得る者なることを要す」という項目があった。

この広告をみた中国人の田亢龍なる人物が、自分のもとで養っていた、不快の感情を持ったことのない居候の日本人、吟蛸子を身代わりを立て応募させたことから、大騒動が起こるといふ構成になっている。吟蛸子はぶんせいむの眼鏡にかない婿候補者に選ばれるが、最後にドンデン返しがあり、けつきよく令嬢るびなはもとの恋人である青年牧師のしんじあ^{しんじあ}と結ばれ、大団円となる。筋は常套的だが、露伴はここにアメリカ人・中国人・日本人等々を登場させ、西洋・中国・日本に関する知識を思いきり盛り込んで、奇想天外、

波瀾万丈の物語に仕立てあげた。

つまるところ婿選びのドンチャン騒ぎ、大騒動が描かれているわけだが、全二十回からなる章回小説仕立ての物語構成は、考えぬかれたものであり、一回ごとのタイトルには、「第一回 古池や蛙とび込む水の音」という具合に、すべて芭蕉の俳句を使うという凝りようである。意識的に、和漢洋混淆の物語世界を作り出そうとするこの戦略が、文明開化のおりからみごと凶にあたり、「露団々」は大評判をとった。

この小説は、明末の白話短篇小説「銭秀才、錯つて鳳凰の儔を占ること」(『醒世恒言』第七卷。『今古奇観』第二十七卷)からヒントを得ている。眉目秀麗、学識抜群の銭秀才が親戚に頼まれ、身代わりになって見合いの席に出たことがきっかけで、さいごにめでたく当の見合いの相手と結ばれるというストーリーである。露伴はこれをネタに大々的に物語構想を膨らませ、『幸田露伴』の著者塩谷賛の言葉を借りるならば、似ても似つかぬ奇抜このうえない「国際小説」を生み出したのだった。

さて、一八八八年(明治二十一年)の大みそか、「露団々」が売れて大枚五十円を手にして浮かれた露伴は、そのまま糸の切れた風のように旅に出る。この旅の一部始終は「酔興記」にくわしい。これによれば、金港堂との交渉に当たってくれた二人の友人を慰労して、料亭で痛飲するうち、皆がソップを向いていた時期に親切にしてく

れた電信局時代の先輩を思いだし、急に会いたくなる。そこで二人の友人を誘い、先輩の転勤先、上州の佐野まで夜を徹して歩く。

佐野で先輩と会ったあと、こんどは一行四人で足利、桐生と見てまわり、一月五日、前橋に到着、ここで他の三人は帰るが、露伴は一人さらに旅を続ける。汽車・馬・徒歩を織りまぜて信州をまわり、木曾路をぬけて高山から名古屋に出たあと、さらに大津・京都・大阪にまで足を伸ばす。こうしてさんさん歩き回ったあげく、四日市にもどって横浜まで汽船に乗り、ようやく東京にもどる。五十円持ってふらりと家を出たのが大みそかの深夜、そのまま着のみ着のまま旅をつづけ、帰宅したのがちょうど一か月後の一月三十一日。なんと呆れた極楽トンボぶりだが、当人は、

二十九日、四日市を発して、三十日の夜一時横浜に上陸し、三十一日家に帰りぬ。時に囊中一銭も無くなりければ、自ら経済の妙を得たるに誇ること甚し。

(『酔興記』)

と大得意であった。行き当たりばったり、思いつくまま旅程をのびしながら、かっつきり一か月、きっちり五十円使い果たして、スッテンになってもどってくるというところが、合理的といえれば合理的である。

これ以後、露伴はまとまった原稿料が入ると旅に出る癖が付き、日本中を旅してまわった。おそらく余市から東京に戻る「突貫紀

行」で、放浪癖が身に付いたのであろう。露伴の初期の作品は、こうした放浪の旅で得たインスピレーションによって、書かれたものが多い。露伴は江戸文化の粋を体現した作家だとされるが、その実、「風流仏」にせよ「対髑髏」にせよ、「いさなとり」にせよ、初期の代表作品の舞台は信州の山の中であつたり、中禅寺の山奥だつたり、九州平戸の生月だつたり、東京から遠く離れた地方がほとんどである。一種の脱中心志向、あるいは現実世界とは次元を異にする異界志向ともいふべきものが、露伴を旅に駆り立て、その旅が次々に作品を生み出したといえよう。

もっとも歩いて旅したとはいへ、露伴はおりおり汽車を利用している。逆説的な言い方をすれば、この汽車という近代文明の利器が、露伴にとって異界や異境を、すぐ手の届く近いものにしたことはまちがいない。

明治二十一年暮れから二十二年初頭の「酔興記」の旅は、傑作「風流仏」を生んだ。木曾の山奥の宿で出会った、「画になんど見ることが如く清げな」美少女から、ヒロインのイメージを得たのだ。

明治二十二年九月に書かれた「風流仏」は、仏師の珠運と薄幸の花漬け売りの少女お辰の恋の顛末を描いた作品である。珠運は木曾路の須原の宿で可憐な花漬け売りのお辰に出会う。お辰は因業な叔父に痛めつけられている薄幸な身の上であり、同情した珠運は叔父に百円の金を出して彼女を救い、親切な宿の主人に預ける。宿の主

人はお辰と祝言を上げるよう勧めるが、珠運は修業中だからとストイックに拒絶し、そのまま旅立つ。しかし、まもなく重病にかかり困窮したところを、駆けつけた宿の主人とお辰に救われ、須原の宿にもどって療養する。相思相愛の珠運とお辰はかくして、いよいよ結婚する運びになるが、なんとその婚礼の当日、お辰が消えてしまふ。

お辰の失踪は、その出生と深い関わりがあつた。京都祇園の芸妓だつたお辰の母は、維新の志士と深い仲になり、お辰をみごもつた。しかし、恋人の志士はそのまま官軍に参加し、音信不通となつた。お辰の幼いころ、苦勞の末、母は死に、お辰は因業な叔父に引き取られた。そのまだ見ぬ父が出世して今は子爵となり、お辰の行方を捜しあて、婚礼の直前、迎えに来たのである。かくして東京の子爵邸に引き取られたまま、便りも途絶えたお辰を怨みつつ、珠運は彼女の彫像を彫りつづけた。

最初は像に衣装を付けたが、感情が激するにつれ衣装を削りとつてゆき、ついに輝くばかりの裸身のお辰像が完成する。その直後、宿の主人からお辰の婚約を報ずる新聞を見せられた珠運は、怒りに駆られ、ナタをふるって、お辰の像を壊そうとするが、どうしても壊せない。その瞬間――。

……一声呑で身をもがき、其の儘ドウと臥す途端、ガタリと何かの倒るゝ音して天より出でしか地より湧しか、玉の腕は温く

我頸筋にからまりて、雲の鬢の毛匂やかに頬を摩るを、ハット驚き急しく見れば、有し昔に其儘の。お辰かと珠運も抱しめて額に唇。彫像が動いたのやら、女が来たのやら、問は拙く語らば遅し。

この「風流仏」は、中国の仙人譚のように、夢かうつつか、珠運は彫像のなから抜け出してきた幻のお辰とともに昇天し、この世ならぬ世界、異界へと去って行くという、シュールな結末になっている。

こうして「風流仏」では、裏切った女お辰が幻想のなかに溶解し、曖昧に美化さればやかされているのが、めだつた特徴である。これ以後、露伴は初期の作品群において、繰り返し裏切る女を描きつづけた。しかし、その描き方は一様ではなく、時とともに裏切る女のイメージは刻々と変化している。まさしく裏切る女は、初期露伴の作品世界の鍵となるイメージにはかならないのである。

「風流仏」も好評を博し、才能ゆたかな新進作家として注目された露伴は、この年（一八八九年＝明治二十二年）暮れ、日就社（読売新聞）の客友となった。明けて一八九〇年（明治二十三年）一月から二月、傑作「対髑髏」（初出時のタイトルは「縁外縁」）を雑誌「日本之文華」に発表する。「対髑髏」の物語世界は次のように展開される。

日光中禅寺奥の湯宿で病後の身を養った露伴という男が、雪深い

山を越えて帰路につこうとしたが、途中で道に迷ってしまふ。ようやく沼のほとりの一軒家にたどりつき、一夜の宿を乞うたところ、一人住まいの二十四、五の美女が現れ、快く露伴を迎え入れる。夜が更けいざ休む段になると、布団が一組しかなく、二人は譲りあうと、美女（お妙）は急に妖艶な媚態を示し、

サア此方へござれ御一所に臥みませう、妾しもあなたの御言葉を立てすればあなたとて妾の一言を立て下さつたとて、御身体からだの解くるでもあるまい汚るゝでもござるまいに、何故なぜそう堅うなつて四角ばつてばかり居らるゝか、エ、野暮やまぼらしい、と柔らかな手に我手を取りて晴も動かさず平氣に引立んとする其美しさ恐ろしさ。

と誘うが、露伴は彼女がとても尋常な女とは思えず、かたくなに拒否する。かくして話しながら夜明かしをすることになるが、そのとき、なぜこんな山の中で一人住まいをしているのかという、露伴の問いに答えて、お妙は数奇な身の上を語りはじめる。

お妙が十八のとき亡くなった母は、今はの際に小箱を手わたした。そのなかに入っていた手紙を読んだ瞬間、お妙は目の前が真っ暗になり、それ以後、すべてのことに興味を失い、どんな縁談が持ち込まれても断りつづけた。さる華族の若君が彼女の美貌を伝え聞き、何度も使者を寄越して求婚してきたけれども、やはり拒否しつづけた。そのうち、若君は恋患いで重態となり、呼ばれて臨終の枕辺に

駆けつけたお妙に見取られ、死んでしまう。お妙は若君の初七日の夜、家を出てさまよい歩いたあげく、この山中に身を落ち着けたること。お妙が話し終わったところ、白々と夜が明け、露伴がふと我にかえると、家も女も消えうせ、足元に白い髑髏が一つ転がっているだけだった。

露伴は麓の湯宿にもどり、山奥に入ったまま出て来なかった人はいないと、宿の亭主に聞くと、そういえば、去年、顔も崩れた凄まじい形相の乞食女が、狂い狂いしながら山奥に入っていくのを見たという。あの白々と静まりかえった髑髏には、匂い立つような美女が、膿みただれた業病の乞食女に変貌するドラマが封じ込められていたのである。その髑髏が、迷い込んだ露伴の前に、魔性の美女、妖かしの女となって出現し、彼を異界へと誘い込もうとしたわけだ。

この「対髑髏」のヒロインは、裏切る女というよりは、男を破滅の淵に誘う魔性の女として描かれている。しかし、「風流伝」では裏切った女（立ち去った女）が彫像の中から出現し、「対髑髏」では髑髏が妖かしの美女に変じるといふふうには、いずれも生命なきモノと化した女が、幻想のなかで再生するという点では、共通している。

異なるのは、「風流伝」の主人公の珠連は女とともに異界へ旅立ったのに対して、「対髑髏」の主人公の露伴は、女によって異界へ引き込まれる寸前、辛うじて踏み止まることである。「対髑髏」で

異界に引き込まれる瞬間立ちどまり、現実に戻す「露伴」の姿には、先にあげた「酔興記」の旅で、放浪に放浪を重ねたあげく、きれいさっぱり一文なしになって東京にもどった現実の露伴を思わせるものがある。異界を志向しつつ、虚構においても現実においても、露伴は必ず現実に回帰するのだ。

この「対髑髏」の下敷きになったのは、いうまでもなく『莊子』「至楽篇」の髑髏問答のくだりである。だが、物語展開は独創的であり、髑髏問答は露伴に発想のヒントを与えたにすぎない。ちなみに、「露団々」にせよ「風流伝」にせよ、この「対髑髏」にせよ、中国の古典哲学や小説を下敷きにしつつも、文体は漢文脈とはおおよそ異質な、和文脈にはかならない。この傾向は、初期の露伴の作品すべてに共通するものである。

さらに付言すれば、露伴は晩年、この「対髑髏」をひどく嫌ったという。いくら本人が嫌っても、この作品が初期露伴文学の傑作中の傑作であることは、論をまたないけれども。

さて、「対髑髏」が世に出たこの年（明治二十三年）、露伴は憑かれたように、ほとんど一年中、旅をした。まず二月に二十日ほど、小田原から湯本をまわる（『客舎雑筆』。席の暖まる暇もなく、続いて四月末から五月末まで約一か月、木曾路から京都に出たあと、神戸を経て四国へわたり、さらに広島、宮島、下関を通って九州に上陸、太宰府から熊本へと向かい、とうとう鹿児島まで行ってしま

〔乘興記〕「まき筆日記」。

当人は、「何の事もなく、浮々うかとあるく楽みの無窮なるを信じて、今日もまた旅にとて立出づ」(客舎雜筆)といたって呑気な風情だが、じっさいには、この九州浮かれ旅が、初期露伴のメルクマールとなる重要な小説「いさなとり」の構想を生むことになる。

鹿兒島からもどってまもない六月、こんどは赤城山に旅し(地獄溪日記)、地獄溪の宿に逗留中、「ひげ男」ならびに「一口劍」と、二篇の小説を書く。前者は後年の史伝小説のはしりとなる作品だが、後者「一口劍」には、またまた裏切る女が登場する。

「一口劍」の主人公の正蔵は腕のいい刀鍛冶だが、お蘭という女と駆け落ちし、いまや農具専門の田舎の鍛冶屋に落ちぶれている。そんなある日、噂を聞いた領主は、正蔵に一口劍(一振りの名刀)を作るよう命じ、五十両の資金を与える。お蘭は大喜びするが、自信がもてない正蔵は大酒を飲んでくどくど愚痴るばかり。翌朝、目が覚めてみると、お蘭の姿はどこにもない。弱氣の正蔵に愛想をつかし、五十両を手を逐電してしまったのである。正蔵は絶望して自殺しようとしたところを、村の庄屋になだめられて発奮、三年後、りっぱな劍を作りあげたのだった。

ここに登場する裏切る女お蘭は、ほんの脇役にすぎない。しかし、その裏切る女としてのイメージには、これまでの「風流仏」や「対髑髏」の場合と異なり、まったく幻想のベールがかぶせられておら

ず、この点がおおいに注目される。

この作品は、明らかに六朝志怪小説集『搜神記』(東晋・干宝編)に見える「干将莫邪」の話を下敷きにしたものである。しかし、ここに登場する刀作りの名人干将の妻は、すこぶる貞淑な女として描かれている。にもかかわらず、露伴はこれを意識的に裏切る女に変型した。こうした作り替えにも、裏切る女に執拗にこだわりの露伴の心理が、くつきりと映し出されているといえよう。

旅に明け暮れた明治二十三年末、露伴は読売新聞を退社し、国会新聞(朝日の村山竜平が主催)に移籍した。月給六十円。これで、生活はうんと楽になった。翌明治二十四年、根岸に移り住んだ露伴は、根岸に住む文人たちと「根岸党」なるグループを作り、月に一度、遊びの精神にあふれた二日間の旅を試みるなど、存分に生活をエンジョイした。ちなみに、「根岸党」のメンバーには、饗庭篁村・幸堂得知・森田思軒・岡倉天心・高橋太華などが顔をそろえ、露伴の幼馴染みの淡島寒月も客分として加わっていた。露伴をはじめ、生粋の東京生まれの文人たちが、江戸文化の遊び心を再現した「根岸党」は、メンバーが次々に根岸を離れ転居して行ったため、二年あまりで自然消滅したのだった。

生活も安定し、気晴らしにも事欠かなくなったこの年(明治二十四年)二月、露伴はとてつもない小説を書き上げた。題して「艶魔傳」。閻魔にひっかけ、艶魔すなわち「艶っぽい魔の女」に変身す

る術を説くこの小説は、背德的だということ、発表もままならなかった、いわく付きのものである。

この小説は、丹波太郎右衛門なる人物が、色道について質問を寄せてきた芦野花子なる女性に対し、書簡体をもって、美人にみせる方法、男を魅了する方法、男を捨てる方法などを、二十七条にわたり、懇切丁寧に伝授するというスタイルで書かれている。指南役の丹波太郎右衛門は芦野花子から伝授金をとっており、書簡のなかには実は三十五条の項目があげられているが、このうち八条は項目だけで解説がない。これについてもとくわしく知りたい場合は、改めて伝授金を支払うべし、などと記されており、全体にいかにも陽気で諧謔的な気分がみちあふれている。

「艶魔伝」では美人にみせる方法がまずいくつかあげられるが、ざっとこんな調子で語りを展開される。

第三は嗜みにて、色艶よくするため鳥獣の肉を嫌はず、湯茶を多く飲まず、津唾を乱りに吐かず、塵を捻り鬢をいぢるやうの五月蠅き手癖を戒め、無暗と衣紋を直す如き事をなさず、起居に骨鳴り節鳴りさせず、万事に付て気を付心を用ゐて仮令ば寝ごみに踏込むとも醜き姿を見せず、よしや内々葱蒜食ふたりとも其後にて直ちに熱湯に酢を点したるをもて嗽して人に知らせざる様巧者にする事にて候。

これに続き、「いぎたなく枕を外し、差櫛を刎ね飛ばし、脇の下の

白なまづを現はし、然も鼻より提灯を出」すなどはもつてのほかと、美女に見せるため、いかに「嗜み」が大切かを、戯作者の語り口を以て述べたてる。「男を捨てる方法」になると、語り口はいっそう辛辣の度を加え、「男零落はてゝ縁切れし後までも良く思はるゝ女こそ手管の上手なれ」と、別れ際のテクニクを縷々、伝授するに至る。

見てのとおり、露伴はここで「艶魔」への変身法を説くという形で、魔性をふりまく女の仮面を暴き、裏切る女の姿をリアルに分析しきっている。「風流仏」以来、裏切る女のイメージを描きつづけてきた露伴は、ここに至り、自分にとって裏切る女や魔性の女は、もはや神秘的な存在ではない。その手のうちはお見通しなのだ、女性のさまざまな生態に対する蘊蓄を傾けつつ、宣言しているかに見える。

(三)

「艶魔伝」を書き上げ、魔性の女、裏切る女の脱神話化を成し遂げた露伴は、一八九二年（明治二十四年）五月から、長篇小説「いさなとり」を「国会」に連載した。この「いさなとり」は露伴が唯一完成しえた長篇小説である。これ以降、明治二十八年から二十九年に書いた「風流微塵蔵」も、その十年後の明治三十九年から四十年に書いた「天うつ浪」も、途中で「興尽き」て、すべて未完のまま

終わっている。

「いさなとり」は全百回の章回小説の形式で書かれており、冒頭から第十三回までは、主人公彦右衛門の現在の姿を描く。伊豆下田の蓮台寺に住む財産家の彦右衛門は当年六十五歳ながら、晩婚で得た若い妻と十五の美しい娘がいる。万事に温厚な人柄のだが、男女関係には病的に神経質であった。この病的な性癖は、どうやら彦右衛門の過去と深く関わっているらしい。

この彦右衛門が妻と娘を引き連れて東京見物に出かけ、その帰りに道に横浜で軍艦見物をする機会に恵まれる。そのおり、昔馴染みの老水夫かこに再会、立ち話をしてる最中、年の頃二十七、八の眉目秀麗の海軍士官荒磯段九郎を見かけ、彦右衛門は大きな衝撃を受ける。その日の夜、彼は老水夫を料亭に招いて御馳走し、今後、定期的に荒磯段九郎の動静を知らせてほしいと依頼して、下田に帰る。こうして荒磯段九郎が、彦右衛門の秘めたる過去の核となる存在であることを暗示し、物語時間は第十四回以降、過去へと切り替わる。

彦右衛門は十四歳のとき、幕末当時、大流行した「抜け参り」に加わって故郷の下田をとびだし、乞食同然の道中を重ねて京都にたどりつく。たまたま数珠屋を営む佐十郎老人と知り合い、その世話で老人の甥庄兵衛が営む井桁屋という染物屋の小僧になる。庄兵衛はもともと染物職人だったが、井桁屋の主人に見込まれ、娘お俊と結婚した婿養子だった。

彦右衛門が奉公してから三年、まじめ一方だった主人の庄兵衛が、ふとしたきっかけで遊郭に入り浸りになり、怒ったお俊は毎日酒をあおり、もろくも家庭崩壊してしまう。彦右衛門は間に立って気をもむが、ある日、酔ったお俊に誘われて不義の関係に陥った。次にあげるのは、翌朝、彦右衛門がはげしい自己嫌悪に襲われるシーンである。

今日は無類いんげいの厭いやな心持、人の顔見るも何どうやら恐ろしく況まして人に顔見らるゝは猶怖ろしく、若し茲こゝに小さき洞穴ほらあななりとも在るならば仮令たとへは如何に窮屈なところなりとも其裡そのうちに身を隠して、一生誰にも面おもてを合せず済すましたき願ひの彦右衛門、生憎物あいにくものやま和なしく情なさけある眼めづか使つかひするお俊が憎くてく、肉を食くらふ前には先づ笑ふと聞きひつた笑ひとは此様なものであらうかとおもふほど、莞爾にや笑ふ美しい顔も何処どこやらに気味悪いところあるを覚え、顔を外向そむけて的あてなしに見開みひらき居る眼の何物も能くは見ざる淋しさ。

(中略) 日の光り月の光りもない場所へ逃にげて行きたいやうな卑怯な心が、関かまはぬく為しかけた悪事を中途で止やむるなどいふことあるべきやと腹の底で力りきむ異な強みのある無法な心と揉み合ひ捻ねぢ合ふ苦しみ。

(第四十七回「日の光り怖し」)

魔性の女お俊に見入れられ不義を犯した彦右衛門は、あるいは罪悪感にさいなまれ、あるいは「毒食らわば皿まで」と自暴自棄に陥る

など、混乱の極に達するが、けつきよく、その夜のうちに井桁屋を出奔してしまう。めざす先は九州平戸の「いさなとり」、すなわち捕鯨の基地生月港である。生月港には、主家のゴタゴタの最中に知り合った、数珠屋の佐十郎老人の息子の惣五郎がいた。

京都から生月へ向かう途中、彦右衛門は広島で困窮し、木賃宿の主人の世話で算盤屋に住み込んだとき、またまた事件に巻き込まれる。もと算盤職人で望まれて財産家に婿入りした銀次郎が、淫蕩な姑に手を焼いているのを見かねて、姑の情夫のヤクザ者をぶちのめし、半殺しにしたのである。醜悪な老魔女が登場するこの話を間奏曲として、第六十回以降、舞台はいよいよ生月へと移る。

生月に到着すると、頼みの惣五郎はいさなとりをやめ、京都にもどるところだった。やむなく彦右衛門は荒々しい気性の羽指（リーダー）として鯨に鉾を打ったり、捕った鯨を船にくくりつけたりする役、権右衛門配下の水夫となる。かくして十年、二十五歳になった彦右衛門は屈強のベテラン水夫に成長し、権右衛門が死ぬと、後任の羽指として大いに力を発揮する。

「いさなとり」の第六十六回と六十七回には、羽指の彦右衛門が大鯨と闘う場面がダイナミックに描かれており、この場面については、平岡敏夫著「殺戮する露伴」（岩波書店刊「文学」一九七五年十一月号収）に詳細な考証がある。これによれば、この場面の下敷きには、一八二九年（文政十二年）に著された『勇魚取絵詞』があり、露伴

がこれからヒントを得て、捕鯨シーンを書いたことはほぼ間違いない。

それはさておき、花形の羽指になった彦右衛門はひょんなことからお新という女と知り合った。お新は最初の夫と死別して実家にもどり、狡猾な性格の継母と暮らす不幸な身の上だった。やがて、彦右衛門はお新と祝言をあげた。継母も同居したので、不愉快な局面もあったが、まずは無難な日々がつづき、一子新太郎をもうける。とかくするうち、彦右衛門は百五十日の長期にわたる漁に出て、家を空けることになる。

長い漁からようやく帰ってみると、どうもお新のようすがおかしい。実は、お新の先夫の伝太郎は生きていた。伝太郎は裕福な商家の跡取り息子だったが、放蕩がすぎて勘当され、お新も実家にもどされた。その伝太郎が許されて家にもどり、彦右衛門が不在の間に、継母が見て見ぬふりをしているのを幸い、お新とよりをもどしたのである。彦右衛門が帰ってからも、彼らは密会をつづけ、とうとう彦右衛門と鉢合わせしてしまう。

このとき、動転したお新は伝太郎に斧を渡し、彦右衛門に打ちかからせた。彦右衛門がその斧を奪い取った直後、凄まじい惨劇が繰り広げられる。

外大股きられて血はさつと迸るに、汝よくも我を斬りしと忿怒一段激して死身になりし彦右衛門、斧持つ敵の手を捻ち上げて

奪ひ取らんと揉み合へば、お新はうろく、新太郎は物音に驚きて泣いだす、行燈は倒るゝ、婆は平日の口喧しきにも似ず何処かの隅に潜み居る始末。一場埒なく乱れて黒闇々たる其中にキャッと魂消る声はたしかに伝太郎なり、聞て驚くお新の今さら急に逃げ出さんとする様子。汝淫婦めと背面より心当に浴せかければ、同じく最後の一声たて、其儘息は絶たるらし。之にも余怒の治まらねば、見すく不義を許したる軽薄婆め覚悟せよと、娘の声に驚きて思はず知らず立ちあがりたる婆をも酷く首刎ねたり。

(第八十一回「今殺されうも知らないで」)

こうして三人を一気に斬り殺したあと、彦右衛門は、「後脳打ち割られて俯し居るお新、さても気味のよい死状なり。婆が首の頷にかけて七分まできれ居るも愉快におほえ……」と、まるで鯨に銚をつきさしたときのような快感をおぼえるだけで、つゆほどの後悔もない。

ことのついでに、赤ん坊の新太郎も殺して、「我周囲を乾淨白々となし呉れん」と首を絞めようとした瞬間、にっこり笑いかけられ、「慄然寒気ざし、満身の毛孔より風出ると疑がはるゝまで」総毛だつて、我にかえつたのだった。そこで新太郎を抱えて海に飛び込んだが、死にきれず、新太郎を小舟に乗せて流し、自分も別の舟に乗って沖へ向かう。

以上が、彦右衛門のおこした惨劇的事件の概要である。「風流仏」以来、「対鶴體」「一口劍」と、魔性の女、裏切る女を描きつづけてきた露伴は、「艶魔伝」における脱神話の操作を経て、「いさなとり」に至り、鯨の殺戮を業とする主人公彦右衛門を通し、とうとう裏切る女を殺害したのだ。

裏切った妻を殺害する「いさなとり」の物語展開に、ヒントを与えたのは、やはり明末の白話短篇小説「任孝子の烈性、神と為ること」(古今小説「第三十八卷」)だと思われる。これは、任珪というまじめ一方の薬屋の番頭が、不義をはたらいた妻と相手の男、不義を黙認していた妻の両親、さらには居合わせた召使いまでの五人を皆殺しにする話である。こうして皆殺しにしたあげく、五人の首を切りとり、髪をとかして一つにくくりつけ、それを胸にかかえて自首したというのがこの話の結末だから、血なまぐさいこと、このうえない。

明らかにこれを下敷きしているものの、「任孝子」の物語と「いさなとり」には、人物の設定のしかたに大きな落差がある。それは、「いさなとり」の主人公彦右衛門は、無謬性の権化である任珪とは異なり、自分自身かつて京都で不義の罪を犯したことがあるという、因果応報の設定になっていることである。彦右衛門は裏切った妻を殺害すると同時に、いわばかつての自分に相当する妻の相手殺したことになる。けっきょく彼は裏切った女とともに、過去

の自分をも殺したのだ。「いさなとり」は、こうして殺す者と殺される者が重なるという、二重構造をもつ物語にほかならないのである。

「いさなとり」は、転変の末、老岐に渡り生月の捕鯨のボスとめぐりあった彦右衛門が、十年余りこの地で漁師暮らしをして、蓄えもできたところで故郷にもどった顛末をたどったあと、九十九回と百回でふたたび物語時間を現在にもどす。横浜の軍艦でみかけた海軍士官の荒磯段九郎は、すでに伏線が張られ暗示されているように、実は海に流した彦右衛門の息子の新太郎であり、けっきょく親子再会、「いさなとり」の物語世界はいかにも世話物らしく、めでたしめでたしの大団円で結ばれる仕掛けになっている。

露伴が、こだわりつつけてきた裏切る女をついに殺した、この「いさなとり」は、長篇小説としてみごとなた仕上がりを見せているばかりではなく、露伴の文字にエポックを画する重要な作品だと思われる。これ以後、「雪たたき」など、ごく稀な例外を除いて、露伴の小説に裏切る女は登場しなくなるのである。

それにしても、裏切る女を殺し、その姦通相手とオーバーラップさせる形で、主人公自身も殺した露伴は、けっきょく何を殺したのであろうか。余市から東京へ舞い戻って以来、はやばやと文明開化の世に背を向け、憑かれたように旅を重ねつつ、魔性の女、裏切る女のイメージを追って書きつづけた露伴は、この大惨劇を描くこと

によって、自らを破滅へと向かわせるデモニーニッシュなものを清算し、自ら浄化したのだとしか、いいようがない。時に明治二十四年（二八九年）、露伴二十五歳。

「いさなとり」を完成したあと、露伴はじょじょに変わり始める。生き方や文学に対する姿勢に微妙な変化が生じるのである。もっとも、露伴初期の最高傑作と世評の高い「五重塔」が、書かれたのは「いさなとり」完成の直後であった。これは、露伴自身、

長々御愛読を玉はりしいさなとり漸く完結いたし了ぬ。思ふところありて腹稿の一半を削減せしため興薄くなりしは謹んで読者諸君に叩頭万謝つかまつるところなり。其罰として息もつかず引つゞき明日より工事にとりかゝり大急ぎにて五重塔と申すをちよいと建立いたし高覧に具ふべし、大工何ぞ必ずしも長家のみを作らむやと手斧初めの景気のため威張つて御吹聴申すこと然り。

（「いさなとり後書」。「国会」明治二十四年十一月六日号）

と、あたかも講師を思わせる口調で述べているとおり、「いさなとり」の余勢を駆って、一気に書きあげたとおほしい。ここには、裏切る女はもはや登場しない。ひたすら職人のパトスに焦点があてられ、露伴のそれまでの作品に顕著に見られる、暗く渦巻く混沌は陰をひそめるのである。「五重塔」が発表と同時に大評判をとったのに対し、これに先行する、露伴にとってより重要であり、完成度

も高い「いさなとり」が、ほとんど黙殺に近い扱いを受けたことは、いかにも皮肉な現象だといえよう。

「いさなとり」および「五重塔」を書き上げた後、一八九二年（明治二十五年）頃から、露伴は少年文学を多く書くようになった。その一方で、一八九三年（明治二十六年）一月から、長篇小説『風流微塵蔵』を「国会」に連載しはじめるが、翌一八九四年（明治二十七年）、腸チフスにかかって死にかけ、回復後も創作欲のはなはだしい衰えを感じるようになる。このため、断続的に書き継いだ『風流微塵蔵』も、一八九五年（明治二十八年）に中断、けっきょく未完成に終わるのである。露伴が瀕死の床にあった明治二十七年、露伴より一つ年下の北村透谷が自殺する。死にゆく者、生き残る者。明治二十年代前半の文壇で活躍した者たちは、こぞって大きな転機にさしかかっていた。

明治二十八年春、『風流微塵蔵』の筆を折ったところ、露伴は結婚した。中国文学に関する本格的な論考「元時代の雑劇」を、「太陽」に発表したのもこの年のことだ。歩き旅する人であった露伴は、しだいに書齋の人へと変わっていくのである。こうした露伴初期の変身が、「いさなとり」における、あの凄絶な殺戮を契機とすることは、いうまでもない。

注記

本稿を書くにあたり、底本としては「露伴全集」（一九七八年～一九七九年版、岩波書店刊）を用いた。

主要参考文献

塩谷賛著『幸田露伴』（一九六五年、中央公論社刊）
篠田一士著『幸田露伴のために』（一九八四年、岩波書店刊）
平岡敏夫著『殺戮する露伴』（岩波書店刊「文学」一九七五年十一月号収）
など。